

日本初、ボランティア専門の情報誌を発刊

札幌市・NPO 法人エックスナビ

札幌市内の大学やスーパー、図書館、JR 駅などで無料配布されている情報誌がある。

B5版の冊子で、表紙に「月刊ボラナビ」と大きな活字で書かれてある。そのタイトルの上に白抜きの字で「みんなのボランティア情報誌」とあり、「ボランティアをしたい人と、してもらいたい人をつなぐ」と説明されている。

手にとると、ボランティアの求人情報や非営利のイベント情報、NPOの疑問に答えるコーナーなどが掲載されている。冊子は4ページだけで、ボランティアの求人に関して数多くは掲載されていない。しかし、誌面にあるQRコードからホームページ「ボラナビ・サーチ」を開けば、2500件以上の情報が掲載されており、場所や労働時間、仕事内容などで検索できるシステムになっている。

数年前、筆者自身もこの情報誌を見て、ボランティア活動に参加したことがあったため、こういった人物がどのような経緯でこの情報誌を始めたのか興味をもっていた。

■ボランティア専門の情報誌が必要

「月刊ボラナビ」の発行母体はNPO 法人エックスナビ（旧ボラナビ倶楽部）。その代表の森田麻美子さんは、1972年（昭和47年）生まれ。北海道大学経済学部卒業後、NHK 札幌放送局の契約アナウンサーとなり、番組のキャスターなども務めていた。

1998年（平成10年）、4年間の契約を終えてNHKを辞めた森田さんは、次に何をしようか思案中であった。そんなとき、北海道新聞に掲載されていた小さな記事広告に目を留める。以前番組で紹介していた団体が、障がいを持つ子供を助けるためのボランティアを募集していた。

——やってみよう。

森田さんが電話をすると、すぐに面接に呼ばれた。



ボランティア専門の情報誌「月刊ボラナビ」

早速採用となり、仕事を始めたが、忙しい現場だったという。スタッフの全員が掛け持ちで仕事をしており、なんとか時間をやりくりしているため、1人が休むと交代要員がない。

「道新の広告を見て行ったのに、応募したのは2人だけだった。もう一人の人は、その忙しい状況を見ただけで働くのを止めてしまいました。マスコミの力は、こんなものなのか」

そう痛感したという。

新聞の小さな広告だったため、情報量が少な過ぎるのだ。大手マスコミの情報は限られており、一般読者に対する影響力はあるが、専門性に乏しい。ボランティア専門の情報誌が必要なのでは――。

森田さんは、自分自身を振り返って、「もし、もっとボランティア情報があれば、大学時代にカフェなどに行って時間をもてあまさず、もっと人の助けになる活動ができたかも」と残念に思ったという。

なんとか、ボランティア活動の輪を広げることにはできないだろうか。

痛感して後悔したあと、思索して行動する。

「まず、市役所に行って頼んでみようと思いましたが、それより、米国にはボランティア活動専門の情報誌があることを知っていたので、自分でもできるかもしれないと思ったのです」

森田さんは、大学在学中に1年間アメリカオレゴン州の大学に留学した経験や、NHK時代の取材経験もあったためアメリカの事情にも詳しかった。アメリカにあるボランティア求人募集のフリーペーパーについて知っていた。NPO 団体が運営しており、1万5千人が購読。そのペーパーを読んで、ニューヨーク市民が気軽にボランティアをしていることにも驚いていた。

――日本でも、こうした団体を設立しよう。

そう決意したという。26歳のときだった。

■震災後、若者の関心が高まっていた

さっそく仲間を集めて、組織を立ち上げた。メンバーは全部で10人、そのうち8人が、北大、札大、札幌学院大らの学生。

自分ともう一人の同級生以外は、全員が学生だった。阪神淡路大震災以降、若者のボランティアの関心が高まっていたため、学生が積極的に集まってくれたという。

情報誌は、ボランティアをナビゲーションしたいとの思いが込められ「ボラナビ」と命名。北大の横にあった北海道NPOサポートセンターを事務所にした。家賃は1ヵ月1万円。机と電話1本でスタートした。

だれも情報誌を作った経験はない。若さと情熱で進めていった。とりあえず掲載する情報は、各地区の社会福祉協議会に出向き、ボランティア募集の張り紙を見て、その団体を訪れて掲載を依頼した。懸念された広告集めは、企業側から学生イベントのようなものと勘違いされて、気軽に應じてくれた。印刷費は20万円ほどだったが、関係者の寄付や、企業からの広告ですべて賄った。

こうして、1998年8月25日に日本初のボランティア情報誌が発刊された。発行部数1万5千部、16ページの冊子であった。

創刊号には情報誌発行の趣旨が書かれている。

「こんなボランティアをしに来てほしい。私たちの活動を知って欲しい」という人々の声と、「ボランティアをしたい。地域の活動を知りたい」という人々の声の出会いの場です。

■ 情報誌の配布先に苦労

森田さんによれば、編集、広告、情報収集は、わりとスムーズに進展したが、問題は配布先だったという。

ある店で、情報誌の趣旨を説明して「店先に置いてもらえないでしょうか？」と頼

んだとき、

「毎月チェックするのは大変だし、そんな冊子は置けないよ」

そう拒否された。

「学生の作った冊子なんか」という態度の店もあった。図書館や公的機関でも、市役所の管轄だから許可がないと置けないと、断られた。

森田さんらは、飛び込みで店舗や公共機関を回り配布先を探した。

そんなとき、ある大手スーパーに飛び込んだ。

事務所の受付で、「こんな冊子を作ったのですが……」と切り出したが、相手にしてもらえない。意を決した森田さんは、大声を出して「こんな冊子を！」と、情報誌を振りかざした。職員の注目があつまり、好奇な眼で見られたが、勇気を振り絞って説明を続けた。

すると、奥から年配の男性が出てきて、「君たち、こっちに来なさい」と話を聞いてくれたという。

男性は、責任ある立場の人だったうえ、好意的に対応してくれた。

そのうえ、「うちの支店、19店舗すべてに置いてあげよう」と快諾してくれた。

さらには、配送費も負担になるだろうから、全部こちらに送ってくれば、全店舗に配布するからと、言ってくれた。送料のことまでは考えていなかったため、「素直にありがたい」と思ったという。

その大手スーパーに配布が決まったことで、次回からは作戦を変更した。

「あの大手スーパーに配布が決まっている

冊子なのですが、御社でも置いてもらえないでしょうか」

まったく無名だった情報誌だったが、箔がついて話も聞いてもらえるようになったという。こうした努力が実を結び、市内のスーパー、書店、大学、銀行など350カ所で配布された。



「ボランティア活動の輪を広げたい」と話す代表の森田さん

■ ボラナビがモデルとなり全国に

創刊号が好評だったことから、2号は発行部数をさらに1万部増やして、2万5千部とした。部数が増えれば波及効果も上がる。月刊ボラナビを通して情報発信を繰り返していくうちに、イラストレーターや出版経験者らが、「面白い」、「手伝ってみよう」と、メンバーに加わってきた。ネットワークが広がり、情報量も増えた。求人先からも、ボランティアの参加者が増えたと、評価された。

翌年の1999年には、ボランティアや市民活動に興味をもっている人のための勉強会「ボラナビの集い」を開催。さらには、日本財団からの助成事業を行ったり、行政との協働による事業などを始めるため、2001年（平成13年）にはNPO法人に認証されました。文部科学省の事業や、ネットで寄付を募るシステム「ねっとボ金」を運用するなど、様々な活動を行っていく。その後、苦労した配布先も350カ所から、

約1千カ所へと増加、発行部数も四万部となった。ボラナビがモデルとなって、各都市の社会福祉協議会や地方自治体でも独自のボランティア情報誌が発行されるようになった。



「お独り様会」でサクランボ狩りに出かけたメンバー

■ 新たな事業「お独り様会」

現在の主な事業は、月刊ボラナビの発行とホームページ「ボラナビ・サーチ」の運営、そして「お独り様会」である。

この会は、独身者の友だち作りを支援することを目的として男女を問わない。未婚、離婚、死別で独身の人が、会員の文集や会合を通して思いを共有して、同性や異性の友だちを作る会である。会員同士が自主的に会合を企画、カラオケやビール祭り、バーベキュー、ドライブなどを毎月5～6回行っている。開かれる会への参加は、本人の自由である。入会金は不要で、月々1980円の会費が必要。2015年10月3日現在、162人(男性53人、女性109人)の会員がいる。年齢層は高めで、60代以上がその半数を占めている。

この会を始めたきっかけは、孤独が社会問題になっている背景があったから、という。2011年に道庁の委託事業としてスタートし、2年後に自主事業とした。

「結婚紹介所は、結婚が目的だが、ここは同性でも構わない。同じ立場の人が集う場があれば、話し相手ができる、互いに深

いケアができるはず」と、森田さん。

■ 組織運営の課題と展望

現在、エックスナビの理事は3人、事務局2人、スタッフ10人、会員約200人(お独り様会会員含む)といった規模。

2013年4月号から、月刊ボラナビの誌面を16ページから4ページにして、ネットでの情報提供に中心を移し、コストを削減している。発行部数も1万5千部として、配布場所を1千カ所に限定した。紙媒体は経費がかかりすぎるため、なんとか効率よく事業ができないか模索している、という。

今後の展望について、森田さんは「お古つながるプロジェクト」をあげる。同じ保育園に通う保護者同士が着られなくなった子供服を譲り合う仕組みだ。子育て世帯を経済的にサポートできて、廃棄されている資源も活用できる。子育て世代の交流促進にもつながるといふ。

「保護者が月5千円でも節約できれば、年間6万円の現金給付と同じ効果があるはず」そう、森田さんは目を輝かせ意欲を見せていた。

■ 連絡先

〒060-0061

札幌市中央区南1条西7丁目12-5
大通パークサイドビル3階

NPO法人エックスナビ

代表 森田 麻美子(もりた まみこ)

TEL/FAX: 011-242-2042

(火・木・土 10~13時)

Email: volunavi@npohokkaido.jp

URL: <http://www.npohokkaido.jp/volunavi>